

第 4 回プリオン専門調査会における議論の要点

日時 平成 16 年 2 月 3 日 (火) 17:00 ~ 19:30

場所 食品安全委員会 中会議室

議事 米国における牛海綿状脳症 (BSE) に伴う海外調査及び日米会合の状況について

< 議論の要点 >

海外調査団の報告書及び米国の追加的措置を踏まえ、以下の問題点を明らかにするために、さらに情報収集を行う必要がある。

1. BSE サーベイランスについて

- (1) 対象牛の種類と割合が不明確であり、BSE の汚染状況を把握することができない。
- (2) スクリーニング検査と確定検査の検査方法、検査体制等が不明確であり、BSE サーベイランスの検査の信頼性を判断できない。

2. レンダリング及び飼料管理について

- (1) 農場死亡牛及び特定危険部位の除去後の処理方法 (レンダリングなど) が不明確であり、BSE の汚染拡大の可能性も否定できない。
- (2) 飼料の製造管理の実態や監督方法が不明確であり、交差汚染の可能性が否定できない。

3. 牛の個体識別制度について

- (1) 米国が実施することを検討している牛の個体識別制度の内容を確認する必要がある。

4. その他

- (1) 追加的な BSE 対策が適正に実行されるよう監督システムを強化する必要がある。
- (2) 今後リスク評価を行うにあたって、日本で確認された国内 8 頭目及び 9 頭目の BSE 感染牛が重要なポイントになることから、国際的な見解も含めてさらに情報収集する必要がある。

第5回プリオン専門調査会の概要

日時 平成16年2月20日(金) 17:30~19:30

場所 食品安全委員会 大会議室

議事 国際専門家による米国のBSEに関する調査報告書について

調査団長を務めたキム博士(前スイス連邦獣医局長)から国際専門家による米国のBSEに関する調査報告書の概要について説明の後、質疑応答が行われ、以下の見解が示された。

1. 北米全体にBSEが定着しているとの認識の下、BSE対策を強化すべき。
2. BSEリスクが低いことが証明されるまでは、特定危険部位の除去を12ヶ月齢以上とすべきであるが、実行可能性から30ヶ月齢以上とすることを認めるものであり、BSEの汚染状況を把握するためのサーベイランスの強化を優先すべき。
3. サーベイランスについては、30ヶ月齢以上の全ての死亡牛等のリスク牛を検査すべきであり、そのためには、迅速検査法の導入、検査施設の強化、獣医師や畜産農家等に対する教育が必要。
4. BSEのリスクを低下させるためには、特定危険部位を食品や飼料等から完全に排除することが最も重要。一定月齢以上の全頭検査はBSE対策として意味があるが、要するコストに対して得られるものは少ないと考える。
5. BSEのリスクについては、米国に限らず、現在の不十分な科学的知見から不確実であり、限られた資源を有効利用するためにも国民等へのリスクコミュニケーションを実施することが重要。

第6回プリオン専門調査会の概要

日時 平成16年3月3日(水) 16:00~18:15

場所 食品安全委員会大会議室

議事 変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)と牛海綿状脳症(BSE)について

英国海綿状脳症諮問委員会の委員長を務めるピーター・スミス博士(ロンドン大学熱帯病疫学教授)から英国におけるBSEとvCJDの流行について解説いただいた後、プリオン専門委員との意見交換・質疑応答を行った。概要は以下のとおり。

1. BSEとvCJDとの関係については、英国における地理的分布や潜伏期間等の疫学データの分析によって、それらの関連性が強く示唆される。
2. BSEの流行については、これまでに行った飼料規制等により抑えられるようになり、公衆衛生にとってももはや重大な問題ではなくなったと考えられる。また、vCJDについても減少傾向にあると考えられる。
3. BSEやvCJDのリスク評価には、不確実性が伴うものの、疫学データを統計学的・数学的に分析することは有効な方法である。